

こどもの遊びの現状

手づくりほいく研究会代表 酒井妙子

いじめ、自殺といったとても残念な事件報道が相次ぐなか、近年の子どもたちの引きこもり・不登校・無気力・指示待ち・若年性鬱・拒食等という心の問題や変わった行動もとても気になる。そして、これらのことが少なからず、本日私に頂いたテーマである「子どもの遊びの現状」に関係しているのではないかと思う。

1. 果たしてこどもは遊びの天才か

こどもと言えば「遊び」が容易に想像されるように、私達は「こどもは遊ぶものだ」とか、「こどもは遊びの天才だ」とか思いこんではいないだろうか。果たして本当にそうだろうか。私がか関わっている冒険遊び場で大勢のこどもたちがやってくる。遊び場だけ「遊びにくる」というよりは「やってくる」と表現した方が彼らの行動を表すのにじっくりいく場面が少なからずある。例えば、屋外の遊び場なのに大人とお喋りをしたり、ゴロゴロ寝ころんだり、家から持ってきたゲームをしたり、私達が考える「遊び」とはだいぶかけ離れた時間を過ごしている。

2. 遊びが成立するための「遊び環境4要素」

『あそびの環境デザイン』の著者、仙田満氏によると、こどもの遊びが成立するには「時間」「空間」「友達」「方法」という「遊び環境の4要素」が必要である。「遊びたい！」という強い気持ちがあれば、4要素の成立を待たずして彼らは遊ぶ。しかし、その気持ちに少し元気がない時にこれらの要素が必要となる。そこには「自由」が保障され、こども自身が十分な時間があると感ずること、十分と思える面積や管理や制限のない自由な空間が保障されていること、遊びたい友達が遊びたい時にいること、そして遊びの方法を伝えていく機会や組織が存在していることである。遊びの天才と言われたこどもたちがその才能を発揮するには、大人社会に存在している時間・空間・人間関係を見直す必要がある。

3. こどもにとっての遊び、おとなが考えるこどもの遊び

最近、遊び場で次のような親子の会話を耳にすることがあり興味深く受け止めている。遊び場には電車が一両設置され、中で絵本を読んだり、玩具で遊んだりできる。座席に寝ころんでゴロゴロするのもなかなか居心地が良くこどもたちには人気。来るなり電車の中に入ってくるこどももいるが、そこで親たちの「今日は遊ぶっていったでしょ！早く外に出てきて遊びなさい！」という言葉を聞く。かつて「勉強しなさい」と言っていた親たちが今度は「遊びなさい」と言っている。先ほど「遊びにくる」よりは「やってくる」と記したが、本当にこどもたちは遊んでいないのだろうか。結論から言うと、大人が「こどもの遊びだ」と考えているような遊びをしなくなった。「遊び」とは本来どんな活動であっても本人が「遊び」と自分の中で位置づけた事柄のみが「遊び」であって、これが遊びという活動などない。お絵かきが遊びである時もあれば、そうでない時もあるように、時には算数の計算ドリルや国語の漢字ドリルが遊びであることもある。

4. 何故「遊び」が必要なのか、必要な「遊び」とは何か

こどもたちは遊びを通して多くのことを育むと言われ、こどもたちが抱えている問題に対して「遊び」には大きな期待がかかっている。けれども、こどもたちの「遊びの出発点」は「おもしろそう、やってみたいな」であり、「あー楽しかった、またやりたいな、よーしもう一度」である。この気持ちが彼らの「遊び」に対する全てであり、何ものにも代え難い宝物、まさに生きるエネルギー、生きる力の源である。大人が期待するものは、こどもの将来にとって必要不可欠ではあるが、かれらにとってはたまたまの産物にしかすぎない。私は「こどもの遊びをこどもの世界に帰してあげたい!」と願っている。こどもたちの遊びがこどもたちの世界に帰ることで、少しずつかもしれないが、何か、いろいろなことが健康的に変わっていくのではないかと考えている。

地域福祉の推進に福祉現場としてどのように取り組むか

兵庫県社会福祉協議会総務企画部主任 村田 明子

福祉専門職は、常に人を支援することの難しさに日々直面している。地域における他機関・多職種との連携や支援困難事例だけでなく、利用者・家族からの苦情やトラブルにも対応しなければならない現状もある。また、社会的に援護を要する人たちに対する生活圏域を基盤とした援助のあり方や、終末期への支えのあり方など、今後、ますます重要になってきている。本人の真のニーズは何か、最後までその人らしく生きることを支えるということがどういうことなのか、地域福祉の推進に取り組む福祉現場の現状から問題点や課題について、次の4つの観点から報告したい。

1. 社会福祉・地域福祉の現場を大きく変えた介護保険制度
2. 福祉専門職の実態とは
3. 問われる権利擁護の視点と地域で暮らすということ
4. 求められる協働・多様なネットワークの構築の必要性

さらに増加する余暇(自由時間)

武庫川女子大学文学部教授 吉田 圭一

レクリエーションの価値やレジャー(余暇)の機能への期待とともに、それらを可能にする「量」としての余暇(自由時間)に関心を持つことも重要であると思う。21世紀を迎えて、余暇の量は増加するのか、減少するのか。

1 労働時間短縮と余暇

わが国、平成17年(2005)の年間総実労働時間は1,834時間であった。戦後最も多かった昭和